

千代の友つる

爰に菱川氏の画工、一流遍滿して、唐や大和のなにやかや、終に見ぬ世の友までも絵に顕した。無碍な鄙俗も是に心を浮からかして、このような風流な上臈のなりぶりは、さぞ高貴な身分の方を見るようだと、春になつた四方の山ではないが、笑みを含む輩も、もつともである。菱川の画工は世にある限りの事を見聞きして、君臣師弟夫婦親子、善と惡との家業のそれぞれの姿を、まるで海に浸した筆にまかせたようだ。上にことわり書を加えて、上中下の品を定める事、誠に生写しのようではないか。

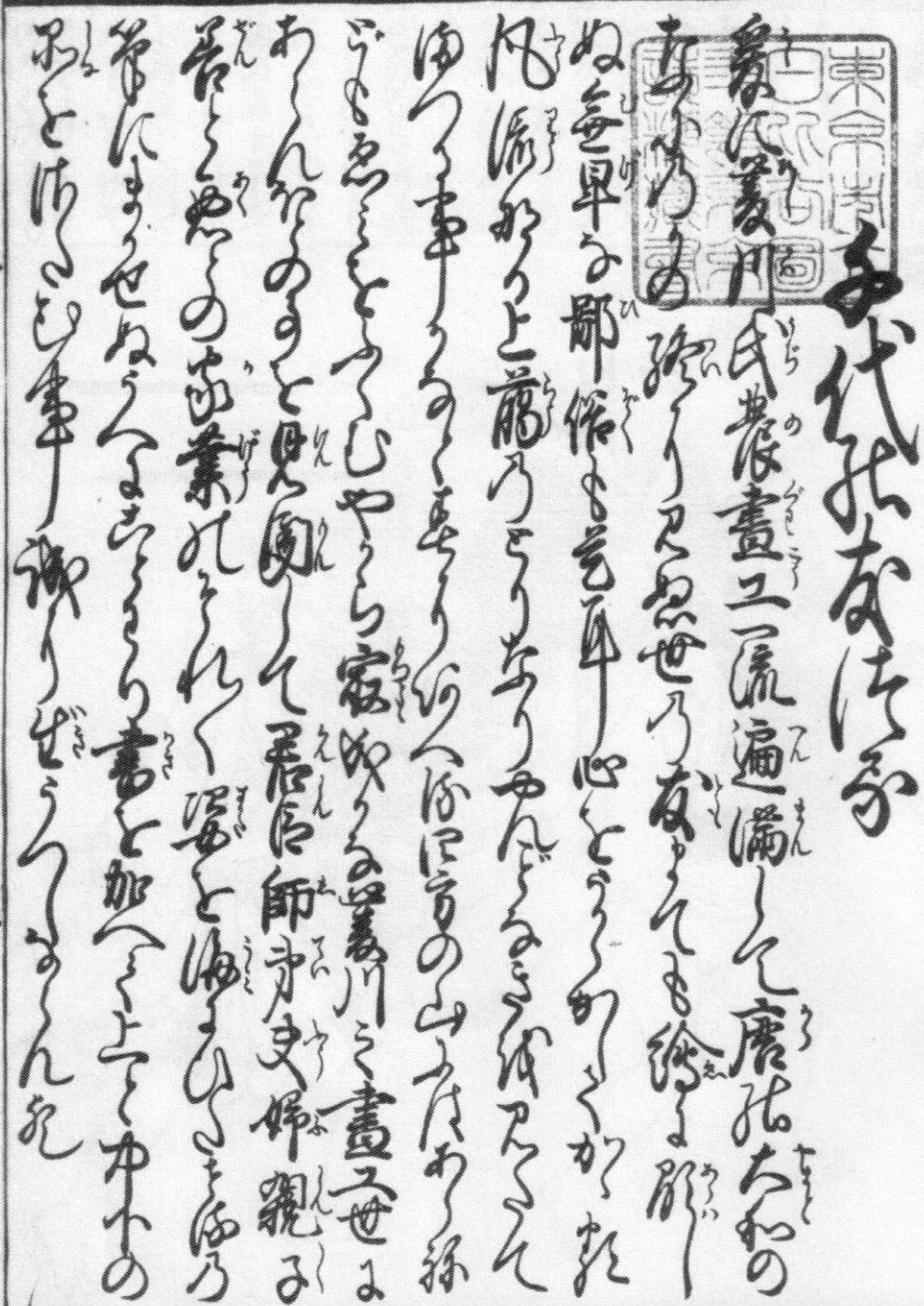
遍満…広く行き渡ること

無碍…はなはだしく身分が低い

鄙俗…田舎びてること

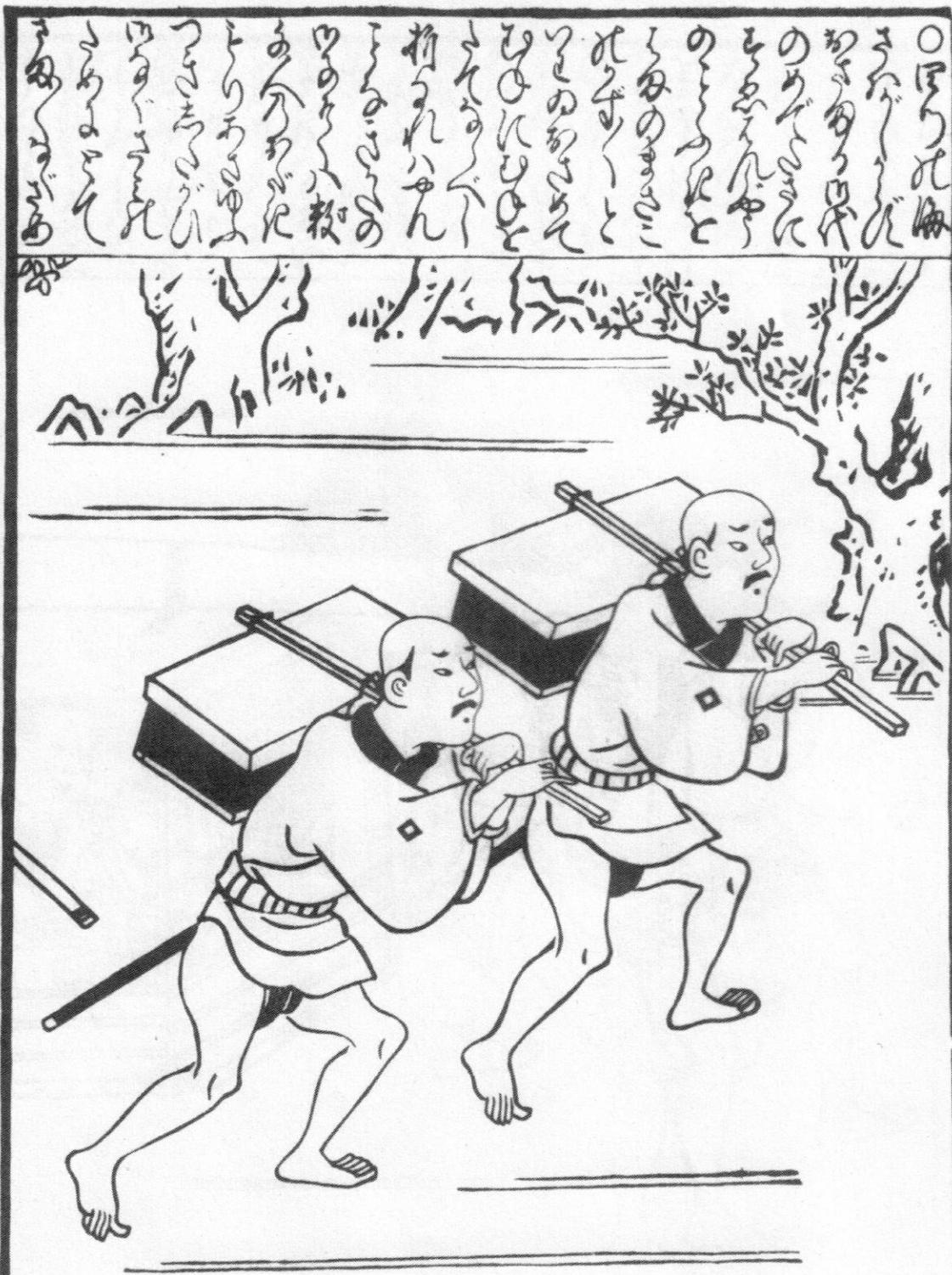
上臈…身分の高い女性、また遊女のこと

春の山…山笑うとは俳句の春の季語



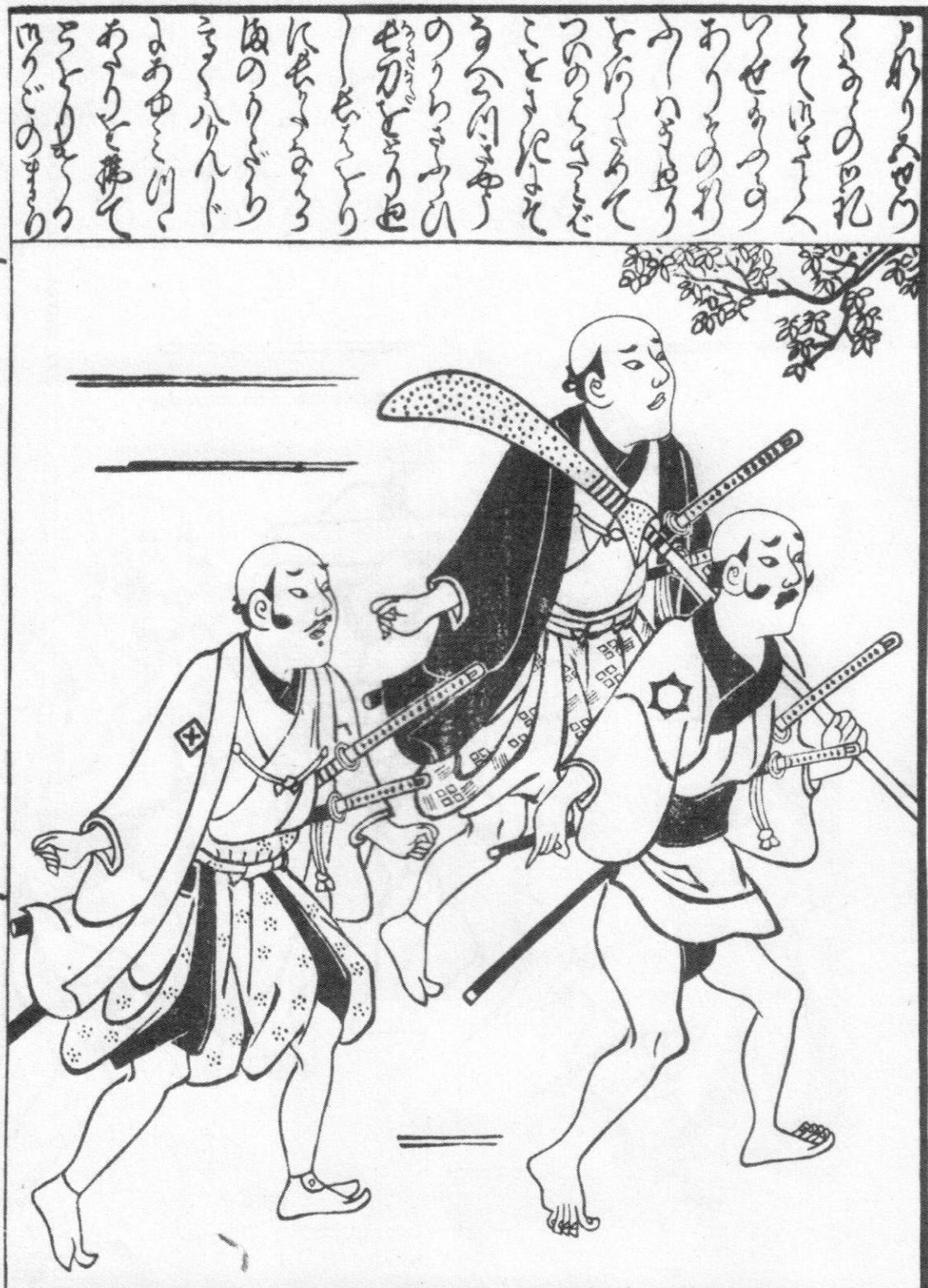
○四つの海騒がしから  
よ  
ず、治まる御代の目出  
おさ  
た  
度さに、末繁昌の寿  
すえはんじょう  
を、浜の真砂の数々と  
はま  
いわ  
祝い収めて、棟に棟を  
おさ  
た  
建て並べし折なれば、  
なら  
おり  
建て並べし折なれば、  
た  
建て並べし折なれば、  
た  
息は、数千人の御抱守  
そく  
やんことなき方の御子  
かた  
おだきもり  
が朝夕付き従い、御な  
しだが  
ぐさまのためと様々  
さまざま  
なぐさめ申す。

五節句などの御礼とし  
こせつく  
おれい  
て御里へお入りになる  
おさと  
事がある。その折には  
ともまわ  
供廻りを新しく整え、  
ととの  
対の挾箱を先に備え、  
つい  
屈強な徒侍、長刀を  
くつきょう  
まわ  
取り廻し、長羽織に  
ながばおり



長刀、袴の股立高く、  
はがかなな はかま ももだち  
八文字に歩みつつ、あ  
たりを払つて通り行く。  
はら  
御駕籠の廻り

御抱守…守役  
御里…領国へ御国入り  
挟箱…着替用の衣装箱、  
棒を通じ従者に  
かつがせた  
八文字…大股に足を外  
側に開いて歩  
く歩き方



には中小姓以上ちゅうおうじょうじょうの侍さむらい

たちが、左右とりまわを取廻しとくしまへおともとも御供ごくふする。六尺ろくしゃくが六人ろくにん紋印もんじるしを一様いちように着ちやくしながら、染手拭そめでぬぐいで鉢巻はちまきし、肘ひじを曲げて駕籠かこをかく。御乳おちの人は、衣きかさ服ふくを着飾わかとのり、若殿わかどのを抱いだきながら、いつしよにお乗りのりになる。鳥毛とりげの槍やりを振り立て、左右とりまわ前後しゆこうを守護しゆごしながら、聞きためとおて通りになる。後備あとそなえは家老かろうらしい年寄としよりが、丸頭巾まるずきんをかぶり馬ばに乗り、仔細しきいらしく頭かたを振り傾かたむけて通おさとつてゆく。御里おさとへお入いり



りになれば、数々の珍  
ぶつ  
物を整えて、御馳走す  
るため、御持遊び  
を整えて、様々

六尺：駕籠かき  
御乳：乳母  
御持遊び：

おもちゃ。手に持  
つて遊ぶの意味で  
おもちゃの語源



なぐさめ申す。それから御帰りと触れがあれば、あわてふためき御供をして帰つてゆく。  
君臣の礼儀は、君を大切にして、忠をなせば、  
君はこれを重んじて、  
知行を加増し与えてく  
ださる。とにかく奉公  
をよく勤める侍は、  
奉公の間、大分知行を  
増やすものだ。奉公で  
きない者、虚病を使い、  
偽り、悪事を好み、明  
け暮れ驕る人は、主人  
に見限られて浪人して  
後に後悔して、昔を慕  
え共、帰参できるすべ



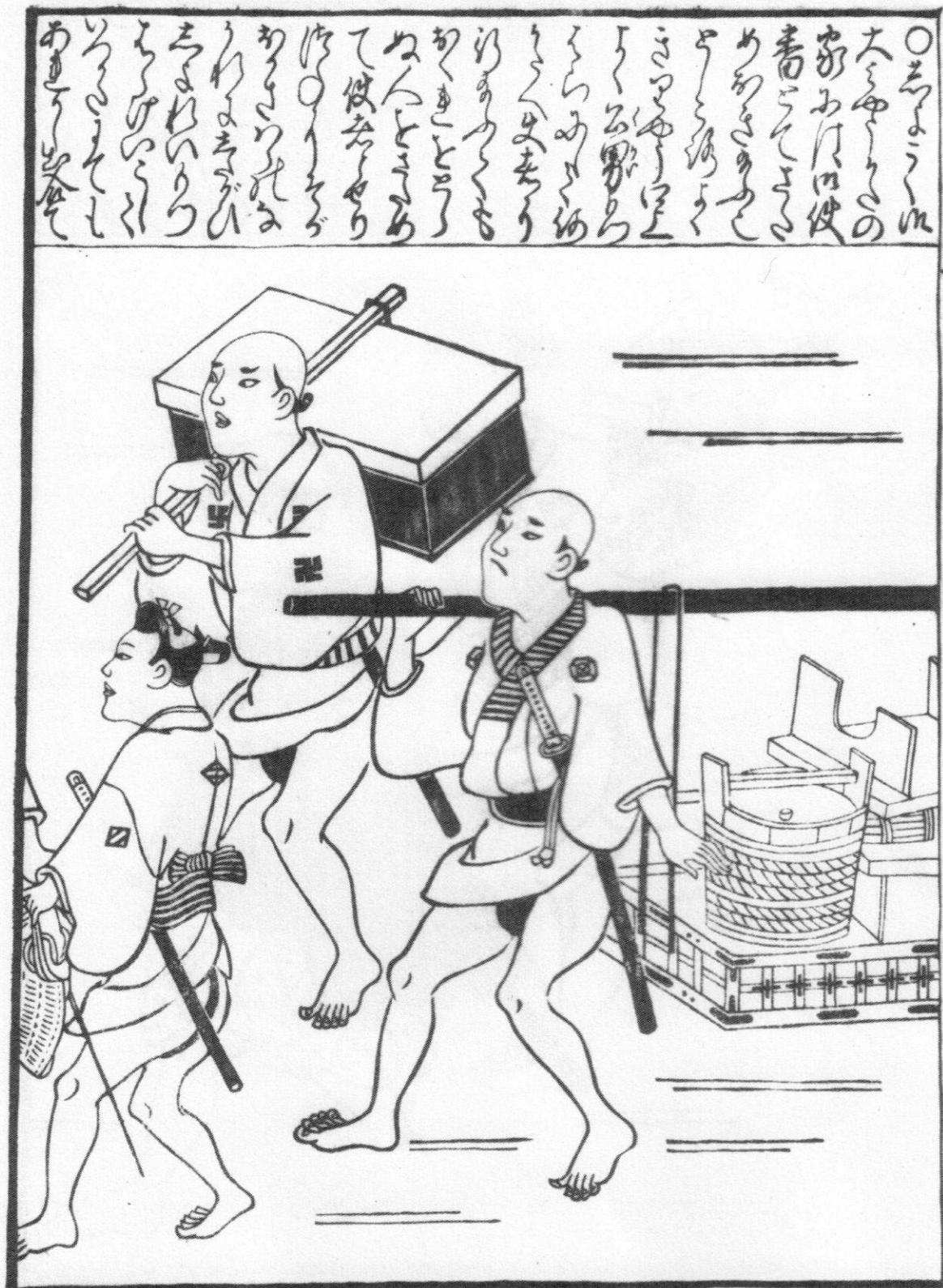
もなく、一生を暮らす  
やから  
輩が多い。たしなむべ  
し、慎むべし、としか  
言うことはない。

知行：幕府、大名が家臣  
に俸給として与え  
た土地  
虚病：仮病  
帰参：一度ひまを取つた  
主人へ再び仕える



○諸國の御大名方の家

には、御使番というものが定め置かれている。年頃ときごろも良く、器量きりょう、口こうも良じょうく、公界こうかいに精通せいつうし、何方いづかたへ使者ししゃに行かせても、遅れおくを取らない人ひとを定めて使者ししゃとするものだ。常に曾我おがさわらや小笠原りょうはの流派りゅうはいに従したがい、諸礼しょれいをひたすら稽古けいこして、どんなところであつても出入でいりなされて、ひとひなり趣向しうこうをひねろうか、などと思つているものだ。折しもその時、嫁娶かしゆの寿ことぶきとして様々さまざまな音物いんぶつを整ととのえ、贈おくりな



される使者があつた。

其品々を持つて出られ

る様子は、いかにも長々

と口上を述べ、奏者に

手を取らせようと思う

気色がありありと見え

て、正面を見開き、馬

を速めて乗りなさるこ

そ、仔細らしくて見事

なものである。

公界…公の場所、世間

嫁娶…嫁入り

音物…贈り物、進物

奏者…取次役

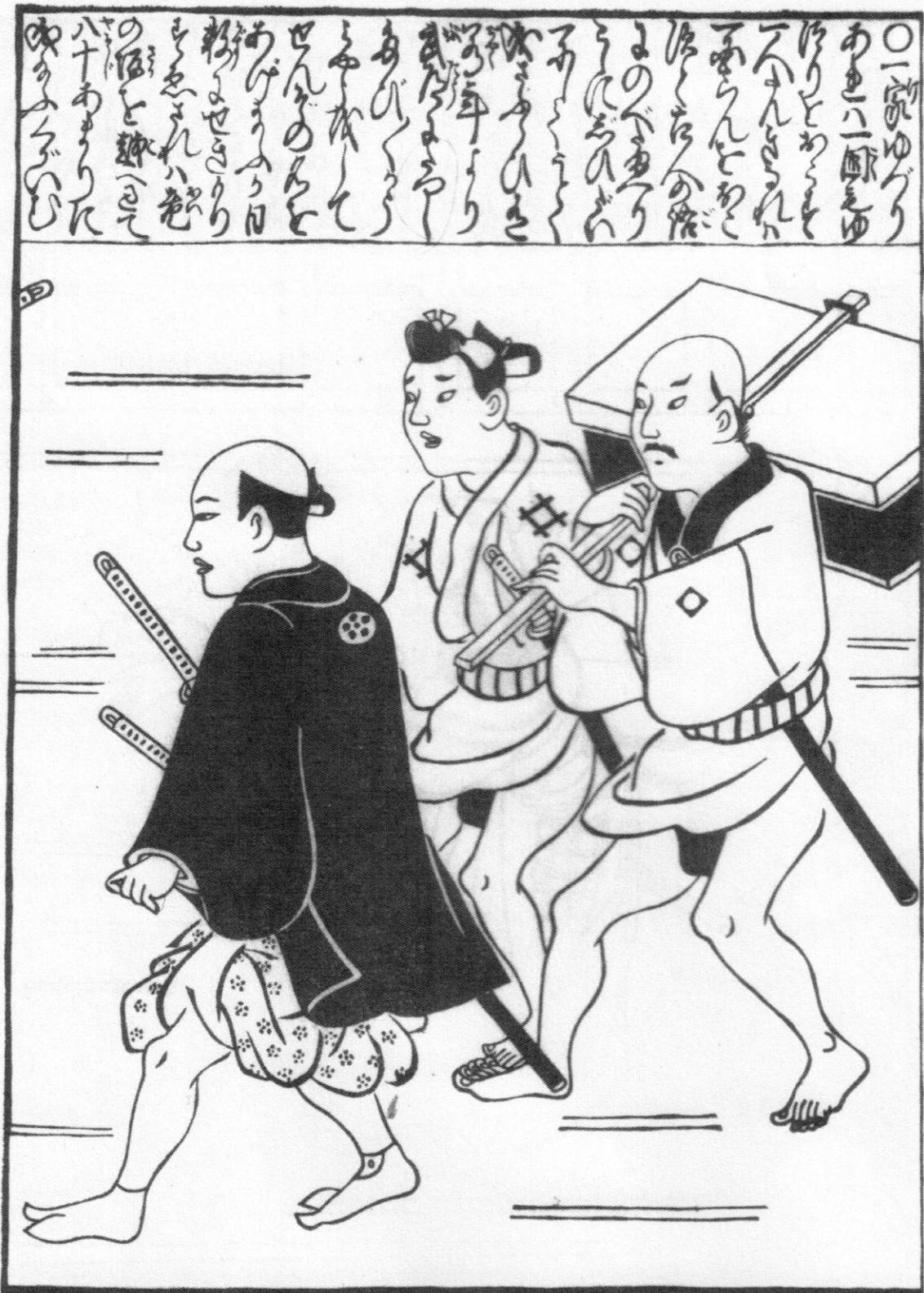
仔細らしく…

いかにも自分はよく心得ているとい

う様子



○君主一家に譲り合う  
きもくに譲り合う  
氣持ちがあれば、國中  
に譲り合う氣持ちが生  
まれ、短気なれば國中  
に亂を起こすと古人の  
言葉がある。ここに、慈  
悲第一にして、有徳な  
侍がいた。若年より  
武道を究め、度々高名  
を挙げて、先祖の名を  
上げられたが、日数に  
関守は置けないの例え、  
老の坂を越え過ぎて、  
八十余りにお成りにな  
つた。公界はもう面倒  
だと、世を譲り、隠居  
して居られたが、今か  
らは、わずかでも浮世



に永らえて、心のまま

に遊山ながゆさんでもしようと、

供の者ともものを召し連れて、

ある時は寺参りてらまい、又あ

る時は神参りなどして

暮らしなされること

そ、日出度めでたいものだ。

竹杖たけづえを

すがりてつくや

翁草おきなぐさ

有徳うとく：徳行の優れている

事。裕福な

遊山ゆさん：気晴らしに外へ遊  
びに出かけること

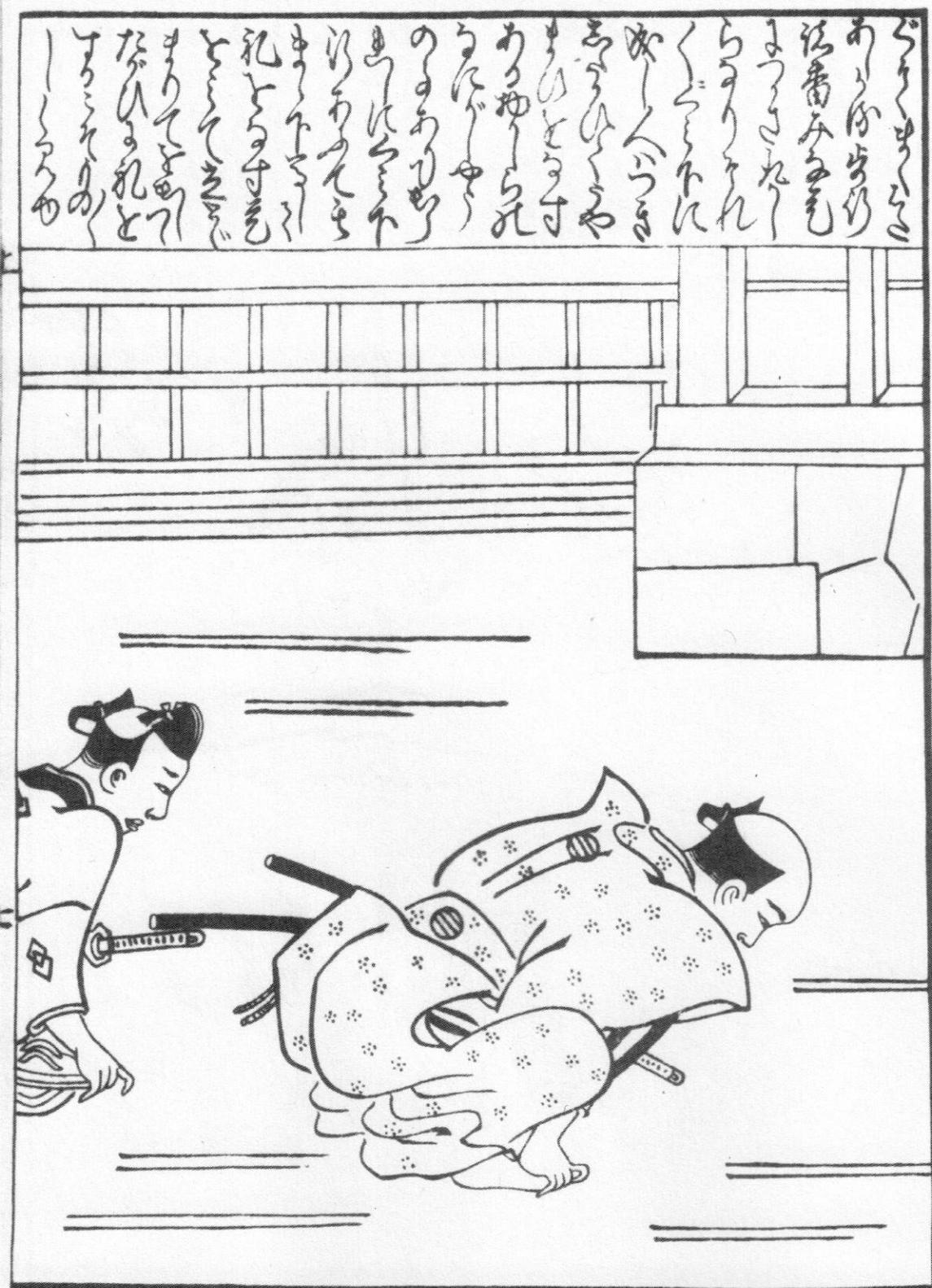


○諸役人の頭たる人は器量、年頃、心だて、慈悲があり、分別良く物事に才覚があり、事を知り、我が身を修めをたらさず、無欲にして功績が残ることもない。万人にそしりを受けず、褒められた人は、後に必ず大物になつて頭をする。惣じて物の頭と言うものは、まず、弓鉄砲、勘定方、具足、幕旗、足軽歩行（奉行）、諸番、皆是につかさ取る頭である。それぞれに組下に成つた人は、付き従つて敬



いをなす。ある物頭の  
何某、所用があつて出  
かけた時に、組下の者  
が行き会つて、其まま  
下馬して礼をした。頭  
は是を見て立ち止まり、  
手を出しながら、互い  
に礼をする」と、そ  
ものものしく見えるも  
のだ。

たらす…甘い言葉でだま  
す。  
そしり…非難、悪口  
ものものしい：  
容姿態度が堂々  
としている  
威厳がある

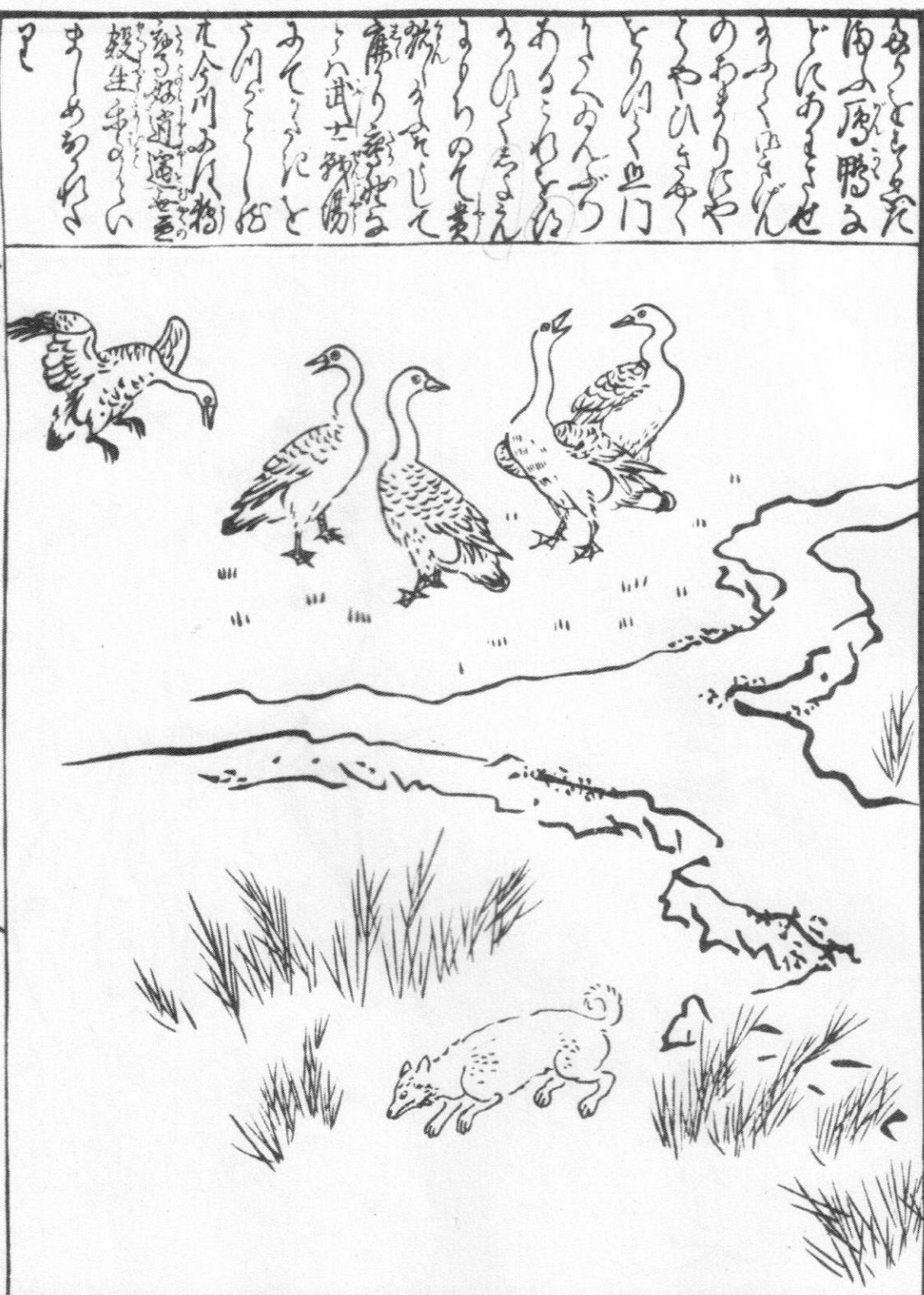


○どこの国でも、守護  
される御領主の若殿方  
が、初めて入部される  
時は、国元が珍しく思  
われて、毎日、茸狩り、  
川狩り、野巻き、鹿狩  
り、狐釣りなどして、  
様々な殺生をして野山  
を家とされるようだ。  
鷹野などに出られる時  
は、三日前から餌を撒  
いて、諸鳥を集めさせ、  
手づから鷹を手に据え  
られる。雁、鳴などを  
獲物になされて、ご機  
嫌のあまり、早飛脚を  
もつて、御一門方へ贈り  
ものとする。これをいた



だいて、初獻に用いて、  
賞翫される。一般的に  
鹿狩り、鷹野などは、  
武士が戦場で敵を討  
つようなものだ。しかし  
ながら、今川には、鶴  
鷹好逍遙、無益殺生  
樂事、と戒めておら  
れる。

入部：領主が領地へ入る  
こと、御国入り  
鷹野：鷹狩り  
初献：酒宴での最初の盃  
今川：今川状。室町期の  
武将今川了俊が弟  
に書き与えた家訓。  
江戸期には子弟の  
教訓書となる



○世の人がよく言つて  
いるのは、唐土の虎は  
毛を惜しむ、日本の弓  
取りは名を惜しむ、と  
言う。敵に会つて一戦  
する時、無手では勝利  
を得る事はむずかしい  
と、武芸を一心に稽古  
される。よい師匠に付  
いて、やわら小太刀の  
兵法を学ばれ、師弟、  
左右に立ち分かれて、  
しない  
竹刀を持つて打ち合う。  
受け開き、足元の差し  
引き、間使い、一つとし  
て兼ね合わなければ、  
敵に会つて勝利を得る  
事は決してないと言う。



兵法の師伝は様々にあ  
る。どの伝えにも臆病  
では勇敢に戦う事  
きない。たしなむべき  
は心である。

させば見えぬ

朝日やおのが

霜の鉤

やわら…やおら。動作が

ゆっくりと。

人に知られぬよ

うに、こうそりと



○治まる御代のこんな

世に、生まれ合うのも  
果報であると、弓は袋  
鞘に太刀を收めるこの  
ご時世だが、おのずと  
いたづら者も出てくる。  
ならば、わや者のため  
にと、槍を稽古する小  
姓がいて、また長刀が  
好きで習う中小姓がい  
た。敵に会つた時、ど  
ちらが勝利を得るかと、  
互いに論じていた時、中  
小姓が言うには、長刀  
に利がある。雲手十文  
字に振り立てれば、た  
とえ槍がどれほどのこ  
とがあつても、突き手



もと もと 元へ寄せる事は出来な  
いだろうと、自慢顔で  
申された。小姓は、そ  
れを聞いて、それなら  
ば、稽古のために二人  
で突くから。仕合つて  
みたまえ、と、槍でおつ  
とり突きかかり、手ひ  
どく仕込めば、長刀も  
ついには出せなかつた。

わや者…無茶苦茶をする人

中小姓…侍と足軽の中間に位置する下級武士

おつとり…落ち着いたしぐさで



○遠國の大名衆の参

勤に召し連れられた小姓が、長屋住居が気づまりだと、朋輩たちと暇をいただき、弥生半ばに興を催して桜の花を見に行く。山桜は散るものだが、まことに見事な花の盛りなればこれはこれはと、手を打つて、いざ歌を詠んで短冊を付けようと、一首づつをこのように詠んだ。

さくらほなさ  
桜花咲かば

まづ見んど

おも

ひかずへ  
日数経にけり

○あんぐの  
あくやうす  
えんそん  
うつきられ  
けむらめり  
うわくうど  
うらやうひね  
くに野とみ  
よりうとう  
ゆれだとみ  
うらやうひね  
うわくうど  
えんそん  
あくやうす  
あんぐの



春の山里

今桜咲きなど

見えて

薄曇り

春に霞める

世の景色かな

春にのみ

年はあらなん

あらをさを

返す返すも

花を見るべく



○御大名方の奥小姓  
衆の風は、日頃、御側  
近く召し使われる人な  
ので、常に良き事のみ  
を見聞なされ、下卑た  
ところは無い。心だては  
女郎のようである。  
とりなりは尋常で、衣  
服も伊達なもの着て  
大小なども金ののしつ  
けを抜き出して差して  
おられるので見事であ  
る。御しんぶ係は下屋  
敷などから、上屋敷へ  
通われる。玉縁の編笠  
の締め緒が長うてきよ  
ござる、の歌の節をも  
歌いそうな、供の弥介



も、作り髭つくひげを伸ばして  
八文字はちもんじに足を踏み振りふとお  
踏み振り通みとおるのは、見み  
事ことである。

とりなり…なりふり、  
人の身なり  
のしつけ…金銀類の延べ  
板を刀剣の鞘  
につけたもの

玉縁の編笠のひらん…

皮で美しい縁  
取りをした編  
笠。万治年間  
主に婦人用に  
流行



○弥生中旬の頃、上下

みなだれ  
皆誰しも心ここにあら

う  
ずと浮かれて、木陰を

もと  
求めに出かける。ここ

ぞと咲く花を、うち眺

まが  
めて、花の下から帰る

ことを忘れてしまうの

は、樽の前に酔いを勧む

ることを忘れてしまうを

は、樽の前に酔いを勧む

ることを忘れてしまうを

は、樽の前に酔いを勧む

ることを忘れてしまうを

は、樽の前に酔いを勧む

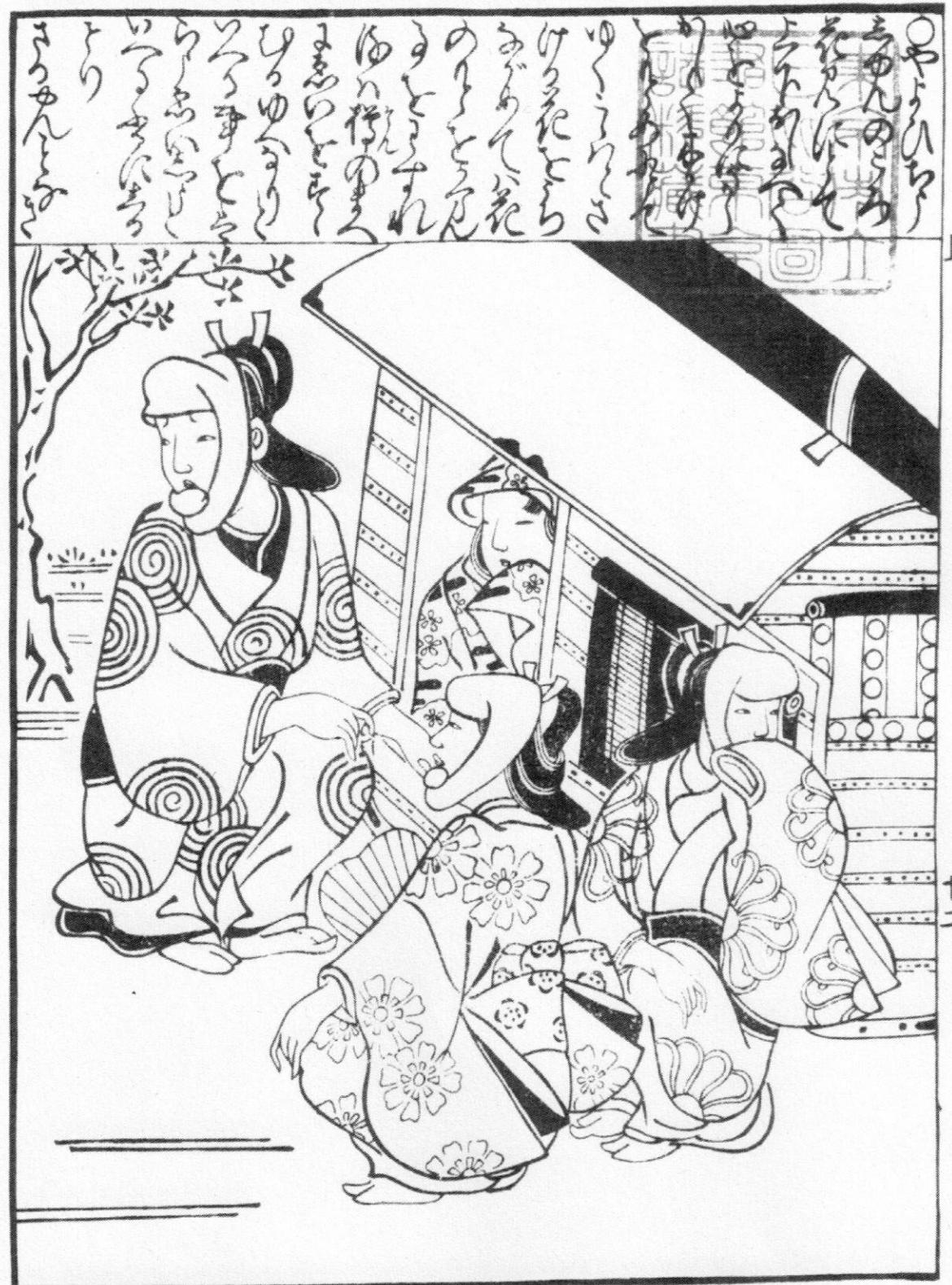
ることを忘れてしまうを

は、樽の前に酔いを勧む

ることを忘れてしまうを

は、樽の前に酔いを勧む

は、樽の前に酔いを勧む



ごらん  
御覧なされた。召使い  
の女郎を伴いながら、  
桜の枝などを折つて、  
家芭にすることにした。

樽(そん)…酒樽  
朗詠集…和漢朗詠集。平  
安中期の詩歌集  
藤原公任撰  
家芭…家のみやげ



○奥方には、局、中居、  
端の風、それぞれ分か  
れて特徴がある。局は  
養い君の乳の御なので  
生涯、御介抱を受けて  
奥方では女郎へ指図し  
ている役である。上臍  
様の位を借るゆえ、人  
は恐れて敬う。衣服は  
きらためて、物事は仔  
細らしくもつたいぶる。  
女中の交わりでは鷺の  
鳥のようで、恐れる女  
中もいない。中居は奥  
方の仰せを受けて、そ  
れぞれに申し継ぐ役で  
ある。女郎と交わりを  
すると言えども、世帶



じみた風がある。端は  
おお仰せを聞いて、或いは  
ふみ文のお使いなどに出て、  
おさと御里、御一門方へ使い  
をする役である。諸事  
しもべ下部の役を務めるゆえ  
その風は卑しい。

乳の御…乳母、御乳の人  
上脇…元の意味は脇(年  
功)を積んだ高僧。  
上の階級、身分の  
高い婦人を指す  
きらためて…整える、念  
入りに吟味  
する  
端(はした)…はしため  
する  
端女  
下部…雑用に使われる者  
召使い



○高貴な御方の御台所

は、常に御座の間に着

き、親しみ参らせてお

られる。客人、局、女

郎、小姓、中居、端な

ど、玉を磨いたような

召使いが、大勢、奉公

の勤めをなしている。

ある時は、三味線、琴、

貝合わせ、歌かるたな

ど様々にお慰め申し

上げ、御膳を召し上が

られる時には、御菓子

などを小姓たちにあげ

られ、御茶などをあげ

られる。夜は寝床に入

られて、灯火をかかけ、

草紙などを読ませて聞



きなされ、歌を詠んだよ  
りして御遊びなされる。  
金の屏風を引回し、金  
糸繚乱を身に飾られて  
おられるので、あたり  
も輝くばかりである。



○女は、かみより魅力的だろうとされるのは、  
見目形優れて美しく、  
目元に愛嬌がある。

生まれつきは、たとえ卑しい下部の娘であつても、振袖の頃より上つ方へ召されて寵愛なされるものだ。彼女らのようなことを、女は氏はないけれど、玉体を伺い、玉の輿に乗ると言うのである。しかしながら、上つ方の姫君とは、格別相違があり、下卑た風がある。このような隠し女を名づけて目かけと言う。



あるいは御座敷などと名  
づ付ける。いずれも遊女  
に近い。その昔にも、こ  
のような女を愛して、  
身を失う人もいたので  
ある。

かみ…上。その昔  
上の方…身分の高い人、  
貴人  
玉体…天子、天皇の尊称



○漢学寮に博学な儒者  
者がいた。数巻の書軸  
を集めて、見ぬ世の昔  
の人を友とするかのよ  
うだ。ある時は四書を  
読んで、孔子の金言に  
もとづく。詩文を読ん  
で山谷、東坡、陶淵明、  
杜子美の心を伺う。  
古文を読んで、蘇子瞻、  
屈原などの文を学ぶ。  
老荘を読んで、賢人に  
親しむ。五十路を過ぎ  
ているので、眼鏡をかけ  
て見台に向かい、講釈  
をされる。出家、儒者、  
聖人、うち交わって聞  
かれる。誠に師の恩は



ありがたいものだ。朝あした  
に道みちを聞いたなら、夕ゆうべ  
に死んみたでもよい、と皆みな  
座ざを立よろこつて、喜よろこばれる  
ということだ。

四書…大学、中庸、論語、  
孟子の総称  
山谷…北宋の詩人、黃庭  
堅。号は山谷道人  
東坡…北宋の詩人、蘇軾、  
字は子瞻。東坡は  
号で蘇東坡とも  
陶淵明…東晉の詩人、名  
は潛。官を辞し  
帰郷、田園詩人  
となる  
杜子美…唐の詩人、杜甫。  
詩聖と呼ばれた  
屈原…楚の詩人、憂国の  
政治家で、楚の将  
來を憂い自殺



○昔、和泉の堺に利休  
と言う数寄者がいた。  
秀吉公が都の北野にお  
いて、大茶の湯があつた  
時、利休は新しい道具  
で、こがしをしほらしく  
立てて公に供したの  
を、秀吉は御感あつて  
作為の有る坊主だな、  
向後、わしに茶を立て  
させよと言われたので、  
利休は、卞和が玉に会  
える心地がして、御供  
をして大坂に下つた。  
日本の大名らが尊敬な  
されたので、今の世に、  
その名を残しているので  
ある。それから金森宗



和、小堀遠州流、古田  
おりべりゅう こほりえんしゆううりゅう ふるた

織部流などの数寄者の  
おりべりゅう すきしゃ

誉れが世に聞かれ、そ  
ほまれ した

れを慕つて、今時に茶  
いまどき さ

道と言つて、茶の湯を  
じうどう いまとき さ

しほらしく立てて、あ  
はいかい

ちらこちらを徘徊する  
くわいはい

と言うのである。

数寄者…風流人。特に茶

の湯の趣味人

こがし…米や麦を焼いて

こがし、湯に溶か

して飲むもの

しほらしく…慎み深く

御感…貴人が感心する事

ト和…中国春秋時代の楚

の人。荊山で得た

玉の原石を王に

献上するが信じ

てもらはず、のち

文王はこれを認め  
磨くと玉となつた。



○人として学問するなら、出家は学問の内に大きな長がある。伏義神農の跡を慕い、学問を好む法師は、人の命を助けるため、四百四病を推し量り、療治をして、次第に名を得て後は知行を取つて、急ぎ、乗り物で駆け回り、あちこちへ発向する。頼もしい限りである。交わつて能のは、医者、智者、福者である。大病を身に受けて苦しむ人がいた。よい仲酌を頼んで、大医を招いて脈をお願いする。



乗り物を速めて案内を  
する。待ち受けていた事なので、亭主は走り出で、ありがたい気持ちを申し述べて、案内して、家の内へ入つていった。

伏羲・神農・

中国古代の神話上

の帝王、三皇。

神農は百草をなめ効能を確かめたと

いう医療の神

四百四病・

人類の疾患の総称。  
地水火風の四大調和が崩れると各百

一の病が生じる

仲酌・なごみ、仲介者



○武家牢人には上中下の品がある。上の牢人と申すは、先祖に數度戦場にて手柄をし、系図正敷、名を得た人。大分の先知が不足して主人より暇をとり、牢人されても、方々より貢が多く、生活には不足は無い。中の牢人と申すは、中小姓以上の御近習を勤めなされ、俄に花が尽き、牢人なされるが、先知のゆいたてが無いので、知行も望まず、身代を望む人で、衣服は美々しいけれど、もったいない。



下の牢人と申すのは、  
身分の軽い役人などを  
勤めて、私欲ゆえ扶持  
を手放すことになるた  
め、先主を名乗る事は  
ならず。長々となぐれ  
いて尾羽を枯らす輩。  
垢がついた衣服で世間  
に暮している。見苦しい  
姿である。

先知：以前の知行、領地  
ゆいて：言い立て。強く  
主張すること  
なぐれ：身を持ち崩  
して、落ちぶ  
れて



○渡り侍、徒士若党  
の風は、中小姓以上の  
奉公人衆とは格別の  
風である。背は極めて  
高く、器量骨柄、人物  
にして、口上も残る所  
もなく、供廻りの折に  
は、長羽織に裏付けの  
袴を股立に取つて、八  
文字に踏み歩く人。  
ものものしくて見事で  
ある。

○一年の勤めもようや  
く明けの春、弥生初め  
の五日になれば、慣れ  
た主人の家を出て、牢  
人の身となり、宿屋に  
行け、首尾よく勤めて



暇いとまを取とり、まかり出でて  
きたなどと<sup>い</sup>い、それ  
から新しい主人を求めめ  
るため、あちらこちら  
に行いき、お目見めみえの首しゆ  
尾びを求もとめるのである。

渡り侍…決まつた主人を  
持たず、年季を  
限り奉公をする

侍

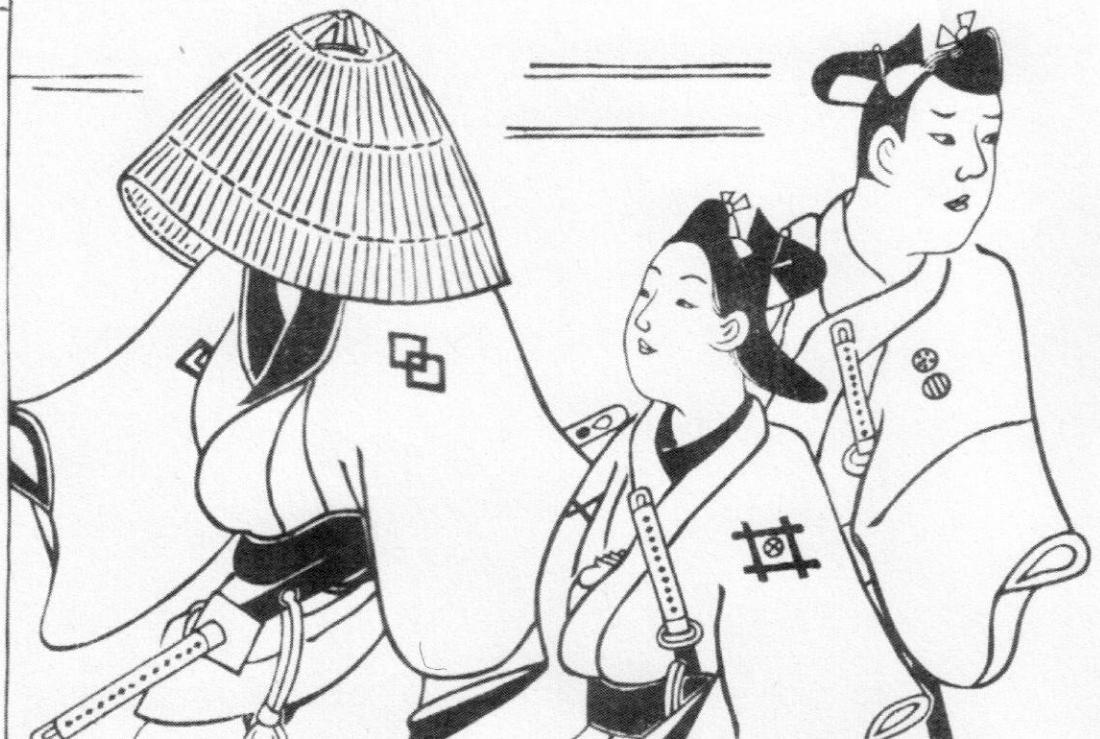
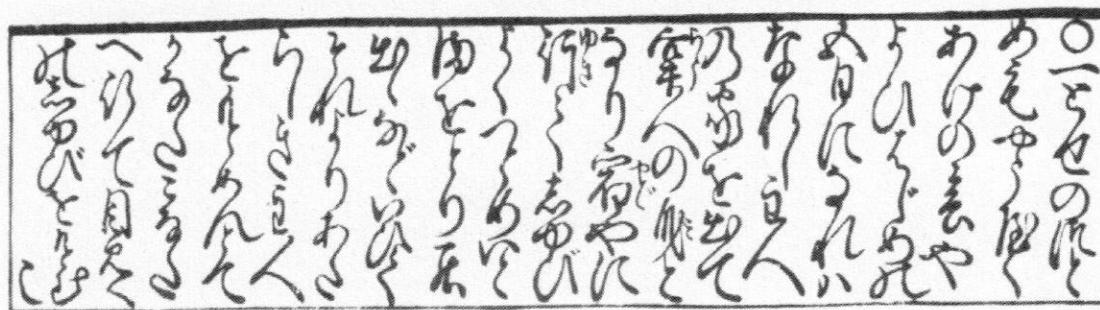
股立…袴の腰部の両側面

をつまみ上げ、帶  
にはさみ、動作し  
やすいようにする  
事を股立を取る  
と言う

ものものしい…

重々しく威嚴がある  
首尾…始めから終わりま  
で。事の成り行き、

結果





ちよの友つる

此下の巻には、下部、田夫、賤の男などの事を書著した。ありとあらゆる仕事の技があれども、武藏野の広い営みの、静かな御座席の楽しみにもなればと、上中下の三品に分けて、嬰童の一葉から霜雪の降り積もる老の技までも、書印で、これを下とするだけである。

東京  
日記  
書  
ちよの友つる  
此下の巻には、田夫、賤の男などの事を書著した。ありとあらゆる仕事の技があれども、武藏野の広い営みの、静かな御座席の楽しみにもなればと、上中下の三品に分けて、嬰童の一葉から霜雪の降り積もる老の技までも、書印で、これを下とするだけである。

田夫…農夫、田舎者  
賤の男…身分の低い男  
嬰童…赤子、乳飲み子  
一葉…人間の幼少の頃

○雨風が枝を鳴らさない、目出度いこの世の中であれば、五穀成就して、早くも季節は秋になれば、一粒万倍の稻刈ろうと、鎌を振り傾けて、野に出て田を刈る。昔、天智天皇の御製に、秋の田の刈穂の庵の苦をあらみ、我ころでのうたう歌のように、朝露を受けて田を刈り、牛馬につけて、自分の家に帰るのである。

月やあらぬと  
里は荒れて  
恨みても



誰浅茅生の  
だれあさじう

衣打つらん

秋風に  
あきかぜ

萎るる野辺の  
しおのべ

花よりも

虫の音いたく

涸れにけるかな

一粒万倍：

一粒の種から万倍  
にも実る稻穂から、

わざかから大きく  
成長するたとえ

御製：天皇作の和歌  
苦：荒く編んだシロ

衣手：袖  
里は荒れて：

九条良経の歌。新  
古今和歌集に載る

秋風に：

中務卿具平親王の  
歌。新古今和歌集



○五月雨を待つて田を植える事は、結夏水と  
言つて、天水の良い頃合を待つて植えるものだ。  
賤のつたない技ではあるが、五穀を作る人であれば、ある人が俳諧の発句に作つたように、蓬萊の田作りや君の國宝、と言うものである。昔、堯舜、我朝の延喜の御代には、我田を人の田と言つて争つた。今は引き替えて、人の田を我が物と言つて争う。耕作仕付けるのは一粒万倍の寿とて、昼の糧に酒などを



も持つて行くのである。

くわ代の

くわで来れば

星川の

朝げは過ぬ

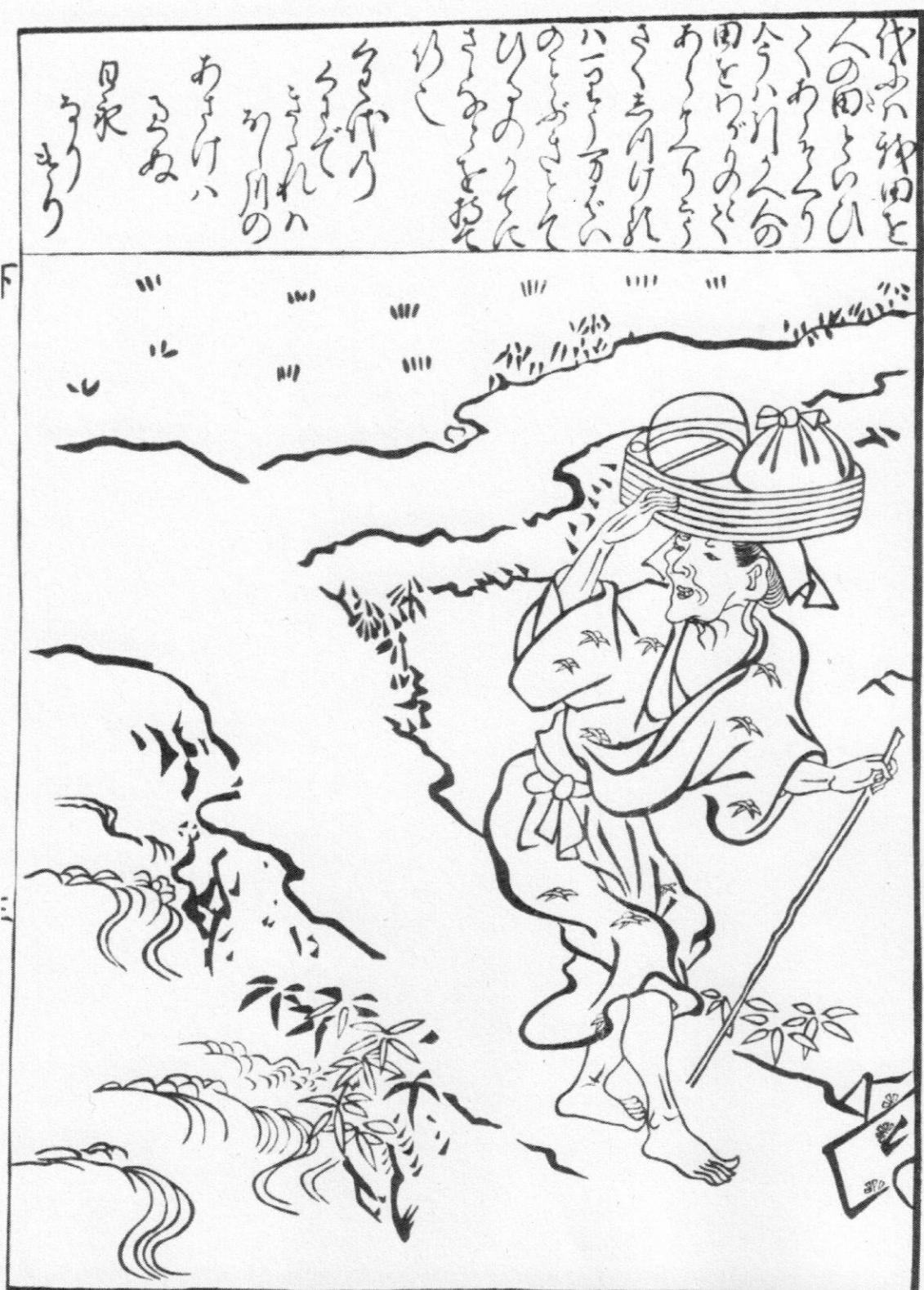
日永なりけり

結夏・夏安吾の初日、旧

堯舜・中国上代の模範的

な二人の帝王、堯と舜。治世の模範とされた

延喜・醍醐天皇治世の時代。模範の治世



○小田原町と言るのは  
おだわらちょう

魚を商う巷である。  
あきな ちまた

遠国の浦々から魚舟を  
おんこく うらうら うおふね  
つけて、此所の問屋に  
ここといや  
着けて、此所の問屋に  
いち  
て市を立てて売る。若い  
者があつまり、これに挨  
拶をして売り払うのだ。  
さつ はら  
ふねよ

舟寄する

とまよりくくる

夜の魚を

おちこち人も  
か

買ふて行くらん

とま…舟を覆い雨を防ぐ

ムシロ

おちこち人…あちこちの  
人



○ここは本町石町と

ほんちよういこく

言つて、異国より渡つた

いこくこふくものう

呉服物を売る所である。

こふくものう

此所の商人はその恰好

ここあきうど

を嗜み、袴を着し、

たしなみやしきかよ

朝に屋敷へ通い、夕べ

あしたやしきかよ

に家に帰つて、その日の

ちようぼかえ

帳簿をあらためる。

かえ

売りえしは

こそでかな

人をはりぬきの

こそでかな

小袖哉

○こうへ本町  
石町とぞ吳  
みよりゆふと  
みゆきりみと  
ゆふやうけふ  
のあまくばま  
くわらとくね  
くわとらゆ  
あくわすやま  
はくよくも  
みのれせを  
わくある

下



○昔、近江の水海(湖)

むかし おうみ みずうみ  
に釣りを垂れる老人が

いた。翁はどのような

人で、釣りを垂れなさ

ると問う人がいた。答

えて申すには、我はこ

の海の主であると申さ

れる。この海の主とは

誰であるか、と言うと

白髭大明神であると

言う。昔は神も釣りを

垂れ、西宮の恵比寿は

鯛を釣り、禪の祖師は

海老を取つて食しつつ、

悟りを開かれる。これ

を殺生と戒められる

けれども、罪では無い

として、好き過ぎて



殺生を好む人は、朝夕  
針を下ろし、網を下ろ  
して魚を取るのである。

己が浪に

同じうろくつ

うかれり

とられて田子の

うらめしき魚

白髭大明神：

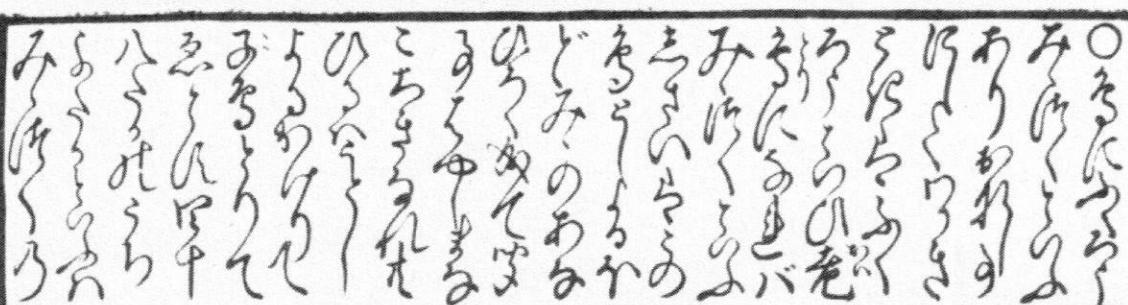
琵琶湖西岸に鎮座

祭神は猿田彦神。

謡曲「白髭」で知ら  
れる



○鳥にふくろう、みみづくと言う鳥がある。  
同じ事であり、若い時はふくろうと言い、老鳥になればみみづくと言う。理由は、この鳥年寄るほどに耳の穴が広く成て、聞く事が早い。眼は大きいけれど、昼は疎い。夜陰つてから小鳥を取つて餌とする。四十八鷹の内、夜鷹と言つるのはみみづくの事である。山中の茂つた林に宿る。此鳥を捕らうとする時は、鳴る音無いように歩み寄つて、小鳥を持つてさえずら



せれば、おとりにかかる  
て捕らえられるのだ。

愛發山

高けの雲に

成ぬれば

おとりにかかる  
口のつたなき

四十八鷹…鷹の種類は  
四十八ある

愛發山…福井敦賀市に  
ある山。奈良時代には愛發関があつた。



○達磨尊者の跡に続い  
だるまそんじやあと

て六租がある。その中に  
しろくそく ふさと  
尺八を吹いて悟りなさ  
しゃくはち ふさと  
れた祖師がある。人を  
ぶつどう すすい  
仏道に勧め入れんと、  
そし  
尺八を吹いて弘通なさ  
しゃくとう  
れるので、どのような  
所へ托鉢にお出でなさ  
たくはつ い  
れても無言で、案内も  
あんない  
なく、尺八を吹かれる。  
のあとくわく  
今それを学んで、居士  
まなこじ  
の姿で白い前垂を巻き、  
まえだれま  
熊谷笠を深々と被り、  
くまがいがさふかぶ  
町々の角に立つて尺八  
まちまちかど  
を吹き、勧進をする所  
かんじん  
に、興にまかせて、鶴の  
きようつる  
巣籠り、千代に八千代  
すこもちよやちよ  
の竹の節、れれつりより



ひとふし  
つの一節を、いかにもお  
もしろく吹くのである。

あ  
明けて今朝

もうこじ  
唐土までも

ゆ  
行く春の

みやこ  
都をのみと  
いそ  
急速

こもぞう  
虚無僧

弘通…ぐつう。仏教を広  
めること

虚無僧…こむそう。普化

宗の有髪の僧。

尺八を吹いて、

諸国を行脚、関

寺、関東では下  
総小金の一月寺  
に属した。



○この所は繁盛の地で  
あれば、軒に軒を並べ  
つつ、諸職人、諸商人が  
店を並べて商いをする。  
ここ万町の広小路と言  
うのは、売り薬をする  
所である。先第一に、  
けんりんが膏薬にかぶ  
と膏薬、小笠原膏薬、  
腫物、切傷、なんでも  
よく効くいばらきなど  
を円帽子に金看板、藤  
の丸の暖簾、療治交じ  
りに商うのである。  
さて次は、ひせい香の髪  
梳油、伽羅の油などを  
かもじに塗つて品を見  
せ、ゆいたてをして売る



ことで、どんな急ぎのつか  
使いも、わざくれと思  
いながら、此所で立ち  
聞きして、巾着の底を  
叩いて買わない者はない  
もの  
のである。

かもじ…女房言葉で髪のこと。そえ髪  
ゆいたて…言い立て、主張  
わざくれ…たわむれ、自暴自棄

伽羅の油…江戸前期、京  
室町の髭の久吉が売り出し  
た鬚付け油



○傾城の大寄と称して  
 揚屋の座敷を取り広げ  
 て、友達が寄り集まつて  
 一座して傾城を呼ぶ事  
 があつた。慣れぬ傾城  
 たちも、二味線、引歌、  
 浄瑠璃、座配比べ、客  
 あしらい、伽羅比べ、酒  
 ぶりなどを互いに磨き、  
 客の馳走をする事こそ  
 晴れがましき有様であ  
 る。買い手の方は、大尽  
 と思わせぶりに、太鼓  
 持ち座頭を引連れて、  
 誰々の和子様らしい風  
 をよそおい、恥らしく  
 手を打ち、宿屋、かの字  
 遣り手、禿に万金丹を



飲ませれば、思うまま  
に回ること、速き川に  
仕掛けた水車より回  
るものだ。

傾城…遊女。美女が色香  
で城や国を傾け滅  
ぼすという意味

大寄…大勢の遊女や芸人  
を一ヶ所に集めて

遊興する事

引歌…古歌を自分の歌に

引用すること

かの字…娼妓、遊女

遣り手…遊女を取り仕切  
り万事切り回す

老女

禿…遊女見習いの童女

万金丹…一分金の異称



○狂言と言るのは、昔

より有つて、驚きようこ  
やとて両家が争つて技  
をなすのを、能狂言と  
言つて、四座の能太夫  
と交わつて、寿として  
翁を渡す時、三番叟を  
踏み、鈴を振つて、神慮  
をすずしめるのだ。

狂言をするのに、一千  
石の松にこそ、千歳を  
祝う後までも、その名  
は朽ちせることはない  
と、押し返し御代を祝  
うのである。一世一代  
と言う勧進狂言があ  
る。世の人これを喜び、  
このような時節に生ま



あ  
れ会つて、上手の芸を

見事ができるのだと、こと

貴賤が群衆して見物

する中で、鷺弥太郎と

言う今をときめく扇

の上手がいた。舞台に

さしかかると宇治の晒

を舞つて、面白いものだ。

鷺：狂言の一派。幕府お

抱え流派で隆盛した

が、明治に断絶。

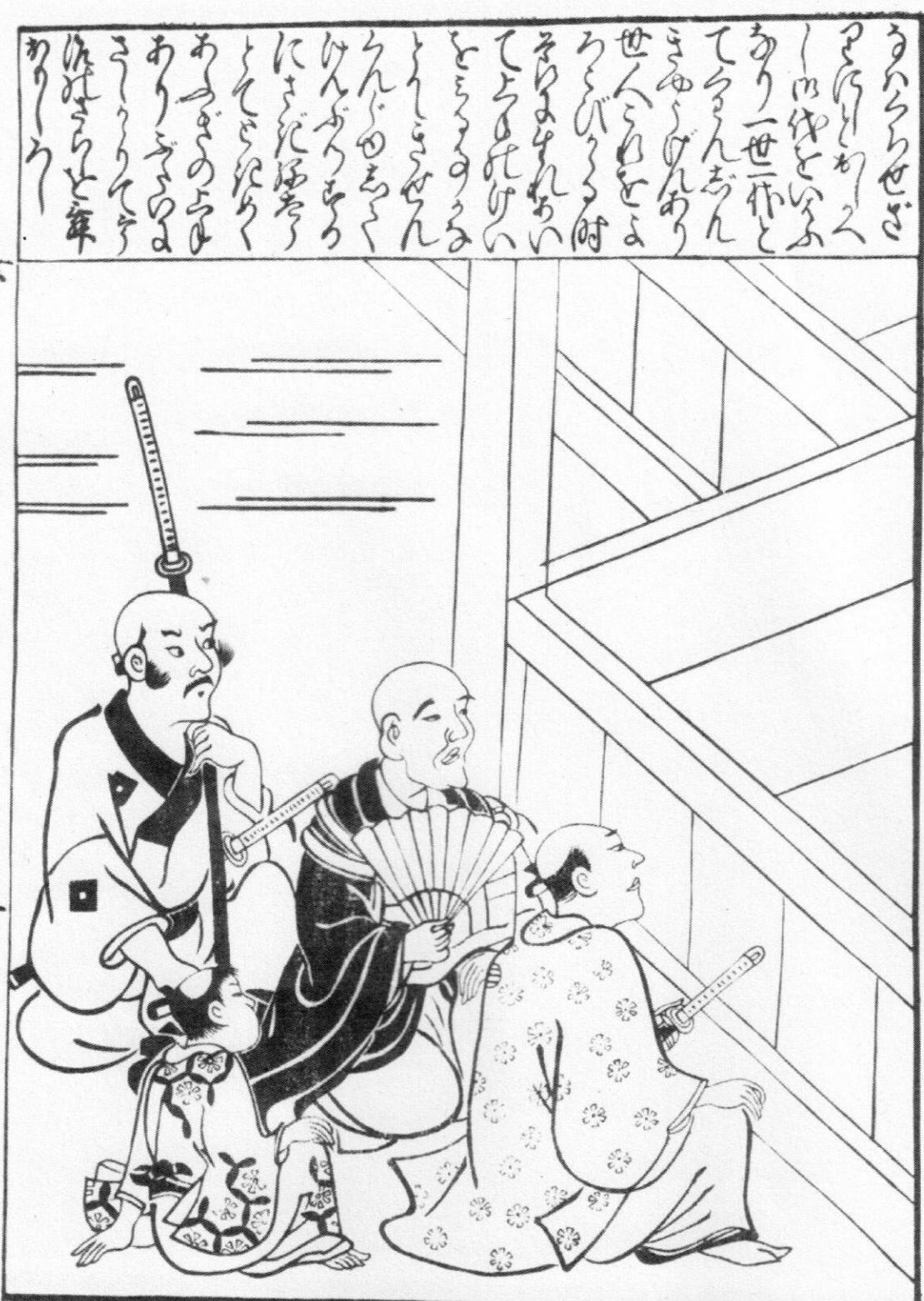
三番叟：能楽で祝言の式

三番の三番目に

舞う祝儀の舞。

宇治の晒：狂言歌謡のひ

とつ。

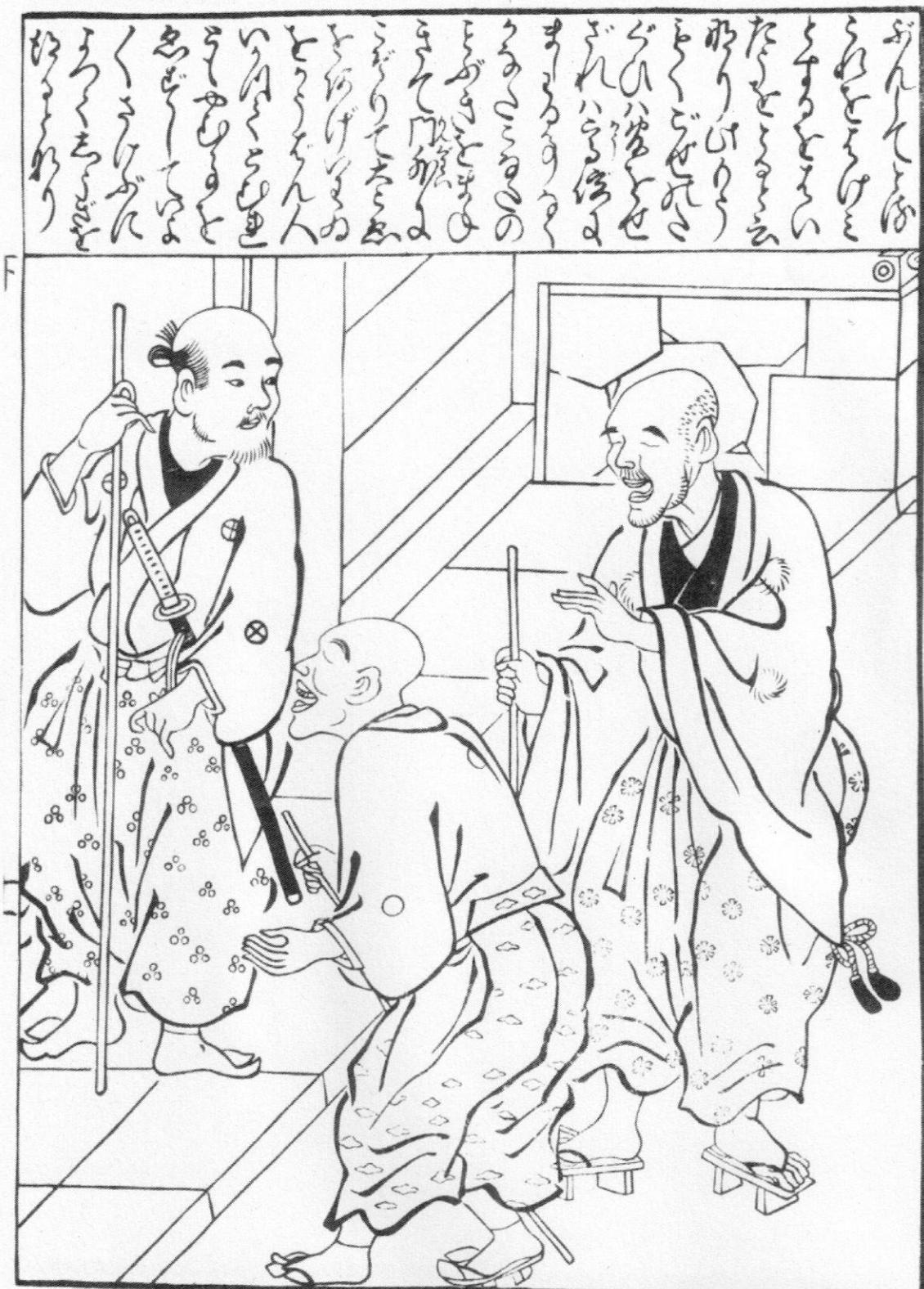


○終生、官につかない  
者を盲目と言い、めく  
らなどと言う。官につ  
くを以つて、座頭と言  
う類、或いは四分勾当、  
検校などと名付ける。  
身分の高い人の座敷に  
交わり、琴、三味線、  
琵琶などを引いて、平  
家物語を語り、小唄を  
歌い、座をもたせて、な  
ぐさみを勧めるのであ  
る。諸国では官についた  
座頭の礼錢を配分して  
受け取る。これを励み  
とする事を配当を取る  
と言うのである。此盲  
目、瞽女の類は官につ



かないので、高位の人に  
交わる事もなく、あち  
らこちらの寿を探し  
門外に集まつて、大声  
を上げ、祝いを乞う。  
番人が怒つて、止めても  
止む事をせずに、益々  
叫ぶので、根負けして、  
祝儀を得ることになる  
のである。

勾当…盲人の官名。検校  
の下で座頭の上  
検校…盲人の最上級の官  
名。専用の頭巾、  
衣服、杖の所持が  
許された  
瞽女…三味線、唄で錢を  
乞う盲人の女



○世間の話に、百間あ  
れば共過と言う言葉が  
ある。工商の家に生を  
受けて、その道に疎け  
れば貧しく暮らす事に  
なる。柄鏡磨と言うの  
は、主人は鏡のような  
ものだと言うように、  
よく向かえれば悪  
映る。悪く向かえれば悪  
く映る事を鍛錬して、  
表を見てしかかれども  
その道に達する事ので  
きない者は、細工下手  
にして一生を貧しく送  
るのを恨んで、鏡磨は  
このように言った。

寒き夜は



鏡のなりに  
かがみ

まるねかな

稼げどついに  
かせ

もたぬ水かね  
みず

と詠む事こそおかしい  
こと

ものだ。帯半襟売り、  
おびはんえりう

灯心、たがかけ、いざれ  
とうすみ

もそれぞれの所作は、  
しょさ

卑しい技である。世の中  
いやわざなか

になぞらえて、知つた方  
ほう

がよい。

百間：百間長屋

共過：多くの者が互いに  
持ちつ持たれつ生  
活すること。

半襟：掛襟の一種、男女  
夏冬物用がある。

灯心：油に浸し火を灯す  
たが：桶などを締める輪



天和二壬戌歲

正月吉日

松會開刊

天和二壬戌歲  
正月吉日

松會開刊